

## 平成26年度経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援及び 大学の世界展開力強化事業合同プログラム委員会（第1回）議事概要

日 時：平成26年4月24日（木）10：00～12：00

場 所：弘済会館 4階 「梅・菊」

出席者：（委 員）明石委員、阿川委員、内田委員、漆委員、荻上委員、  
黒田委員、白石委員、続橋委員、長尾委員、二宮委員、  
日比谷委員、平野委員

（文 部 科 学 省）佐野大臣官房審議官（高等教育局担当）、浅田高等教育  
企画課長、有賀高等教育企画課国際企画室長、太田和国  
際戦略分析官、佐藤高等教育企画課国際企画室専門官、  
鈴木高等教育企画課国際企画室専門官

（日本学術振興会）安西理事長、渡邊理事、西川監事、京藤監事、梶山人材  
育成事業部長、三上人材育成事業部専門調査役

### 議題

(1) 平成26年度「大学の世界展開力強化事業」新規プログラムの公募及び審査方法等について

#### 【質疑応答】

（平野委員長） この件でご意見、ご質問がありましたら、お伺いしたいと思います。

また、この委員会による決定の後で、事務的な手続きが終了次第、本事業の公募開始となりますので、以前も同じようにこの会でご意見を頂いていますが、申請をするに当たって、大学に対して期待するところ等のご意見もありましたら、加えて出していただきたいと思っております。よろしくお願ひします。

（阿川委員） 審議官がおっしゃったように、ロシアとの関係は政治とは別に考えるべきというのはそのとおりだと思います。そういうときに学術間の交流が必要だということも、あるいは世界展開力が必要だということもよく分かりますが、この計画は、多分ウクライナの前に起こったと思います。たまたま今日、オバマ大統領が共同声明の中で、日米の大学、人的交流を強化しようというときに、同じ共同声明の日にロシアと仲良くやるということのインプリケーションは、我々の知ったことではないのかもしれませんが、大学としてはどのように理解するか、大々的にやるのはまずいのではないかと。これからのウクライナ情勢ははっきりしない中ですが、やるべきだとは私も思います。そのことについて何か反対があるわけではないし、中国ともやらなければいけないと思っておりますが、そのときにどのように考えてやっていくべきなのかということについてご意見を頂けたらと思っております。

（平野委員長） 事務局でよろしいでしょうか。委員の方からでもどうぞ。いかがでしょうか。

(有賀室長) 事務局としては、冒頭、審議官の佐野からもご説明申し上げたように、各事情があるとは思いますが、将来的な各国との友好関係を見据えて、地道に交流を進めていくために実施したいというものです。特にこの国と仲良くしたいということを、先生が今おっしゃったようなニュアンスというよりは、各国と友好関係を築いていくという将来的なものを考えて進めていきたいということです。

(阿川委員) たくさん国がある中で、わざわざロシアというわけですね。

(有賀室長) 確かに今回、ロシア、インドという形になっていますが、これまで日中韓をまず開始して、次に欧米との協力をし、それから ASEAN との連携を進めてきたという中で、たまたまタイミングが次にロシア、インドということで、今の情勢にわざわざぶつけたというのではなくて、そこは淡々と進めていきたいということでご理解いただきたいと思います。

(平野委員長) その他いかがでしょうか。

(二宮委員) 基本的なフレームワークは従来どおりですが、これまでの世界展開力の成功体験などを振り返ってみると、例えば外国人教員の雇用の仕方です。交流大学というか、専門分野はいろいろあると思いますが、その国の先生を教授として迎えている場合は、随分質が高まっているのではないかと思います。そこで、少なくともインドの先生は、統計学も含めて、世界でたくさんの研究活動、教育活動を展開されています。これを機にインド人研究者を我が国の大学に積極的に招へいして、任期が付くかどうかは別にしても、もっと大学と地域に入るようなこと、あるいは日系企業ばかりでなく、インドそのものの企業との連携などに、各大学の構想の中で挑戦してもらう事が出来るとよいと思います。特にインドでは人材教育をしているし、我が国でももっともっと活用されるべき優れた高度な研究者が多いと思います。アメリカでもいいですが、またアメリカの先生が来てしまったと、外国人教員というのは、いわゆるステレオタイプの外国人の先生となってしまって、興味を削がれるという感じもあるので、インドからの研究者の招へいについて、可能であれば、検討してみたいと思います。

(平野委員長) ありがとうございます。これは、今日ここにお見えの方も含めて、各大学が申請をするときに、強制では全くないけれども、そういうことも勘案されたら、今までのグッドプラクティスから見てもよろしいのではないかというコメントでよろしいでしょうか。

(二宮委員) ありがとうございます。

(内田委員) 阿川先生のおっしゃることもよく理解できますが、それを言っていると、なかなかこのような形のプログラムは難しいのではないかと思います。ただ、我々日々仕事をしている側から見ると、ロシアも難しいしインドも難しい。今までやってきた国も

難しいとはいいながら、特にロシアもインドも難しい。ですから、ああいうところに留学する希望者は少ないだろうし、また、向こうから来るのをどのようにテイクケアしていくのかというあたりのところを大学側もよほど準備を整えてやらないと、逆に摩擦を起こすのではないかという懸念をしています。ビヘイビアが彼らは違うので、受け入れるときには是非注意をしながら進めていただきたいと思います。

(平野委員長) ありがとうございます。資料にも、派遣する、あるいは受け入れる学生の生活、あるいは環境、学習環境をとということが書いてありますので、是非そのあたりは、逆の不満が出て帰るということにならないようにしていただきたいという希望です。

その他にいかがでしょうか。

(長尾委員) インドに関して私の認識では、アメリカなどと違って、インド通貨を向こうから持ち出せないという状況があります。そういうところが今までの交流とは全然違うパターンになってくると思います。もちろんこちらから経済的支援をどんどんするというのであれば問題ありませんが、向こうから来る学生たちが自分たちの通貨を持ってこられないという状況の中で、どうテイクケアをしていくのかということも、文部科学省として考える必要があるかと思えます。今までとは違う細かいケアが必要かと思えます。

(平野委員長) 大変貴重なご意見をありがとうございます。

(明石委員) 今度、インドとロシアをこのプログラムの中に追加するという件に関しては、阿川委員がおっしゃったロシアに関しては、国際的な制裁が行われている時期に、発表のタイミングその他についてのデリケートな配慮が必要だろうということはよく分かります。インドに関しては、全く違う観点があつていいと思います。アメリカのシリコンバレーでは、優秀な研究者が一番多いのは中国人とインド人であると言われていています。そういう意味では、インドの優秀な学者や研究者を招き入れたいという点では、恐らく国際的にはかなりホットな競争があると思います。そのようなことで、インドの場合、本当に優秀な人を日本に招き入れようとした場合に、他の国の場合に適用されないインセンティブが必要かもしれないという感じを持っています。

それから、ロシアに関しては、ロシア語圏からの招請は初めてだと思いますので、我が国の各大学その他での事務能力の点で、例えば他の国の場合、英語で対応できるとしても、ロシアの場合はどのような事務的な問題が起こり得るかという点も検討する必要があるかと思いません。

(平野委員長) ありがとうございます。

今、各委員から応募する大学への希望を含めて、あるいは文部科学省において、文化の違いもありますし、また、特に事務的な配慮の面でも今までとはまた違う支援が必要ではないかというご意見です。特に、担当事務局もそのあたりをご理解の上、進めていただければと願っています。

今まで動いているプログラムの中で、皆さん非常によくやられています、学生自身と

いろいろ会って話をすると、日常の生活のところで、やはり文化の違いというか、大学のシステムの違いで苦労される場合を現実に何件か見えています。例えば、寮への入り方を含めて、やはり齟齬があったりすると聞いています。学生たちの腰を折らないように、大学のサポートをがっちりとしながら、いい交流を続けてもらえればと願っています。

(有賀室長) ご意見をありがとうございます。できるだけ受け止めて進めていきたいと思えます。その中で一つ、二宮先生のおっしゃったインド人の先生の招への件ですが、資料 2-3「審査要項(案)」をご覧ください。4 ページの「(2) 質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成」の一番下の○で、国際公募による外国人教員の招へい等がされているかというところがありますが、この中の例示として一つ、各国からの先生、例えばインド、又はロシアという形でお示しすることはできるかと考えています。

(二宮委員) ありがとうございます。

(平野委員長) そういうところへ配慮するということを含めて、よろしくお願いします。

(内田委員) 十分分かりきったことだと思いますが、インドの場合にはカーストというものがあります。我々から見ると分かりませんが、彼ら同士の間では非常にあるということなので十分な配慮をしなければと思います。それから、ロシアの場合には、全て軍事技術の方につながっているので、日本の場合には武器輸出三原則で非常に難しい。ですから、大学で受け入れた場合、どこまで情報にアクセスできるようにするのかというような問題にも注意が必要ではないかと思えます。そのへんも文部科学省としても是非ご配慮いただければと思います。

ですから、確かに阿川先生のおっしゃることはよく分かります。それから、明石委員のおっしゃるように、今、本当にロシアとやるということを外部に発表しなければいけないのか。反対しているわけではありませんが、是非慎重に。難しいときに難しいことをやるなど。

(平野委員長) 今、内田委員のご意見を私なりにお伺いすると、前段はよく分かりますが、後段の方の、これを発表しなければいけないかどうかというのは、大変微妙な、本日のここの課題に関わる場所です。阿川先生のご意見を含めて、政治的にはかなり注意をしなければいけないとはいえ、将来を見据えて学生自身の相互交流で理解を深めていくということをベースにこのプログラムは進むのだということでご理解いただいて、進めてはどうかと委員長としては判断して、ご理解いただきたいと思えます。そういうことでよろしいでしょうか。

それでは、基本的にはここで準備をさせていただいたところに加えて、各委員から貴重なご意見を頂いたので、その意味を申請等に生かしていただき、進めていくということにしたいと思えます。公募要領(案) (資料 2-2)、審査要項(案) (資料 2-3)、審査基準(案) (資料 2-4)、ヒアリング実施要領(案) (資料 2-5)、構想調書(案) (資料 2-6)、審査等のスケジュール(案) (資料 2-7) について、原案として了承し、進めるということにしたいと思えます。

貴重なご意見を頂いておりますので、是非このご意見を含め、また、審査に当たっていただく場合も、ご意見に留意して審査していただきたいと思います。

それでは、この件につきましては、文部科学省及び日本学術振興会において、本日の意見も踏まえ、速やかに新規公募を開始していただくとともに、公平、公正な審査をお願いしたいと思います。

## (2)「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」採択プログラムに対する中間評価について

### 【質疑応答】

(平野委員長) 昨年の秋の政府の会議を受けて、事業名に「経済社会の発展を牽引する」という文言が、冒頭に入りました。これについては先ほど説明を頂いたとおりですが、中間評価の調書としては、今、提示していただいたような形で進めたいが、いかがでしょうかということですか。ご意見がありましたら、是非どうぞお願いします。

(阿川委員) 私も今の話の冒頭のところで、タイトルが変わったということについて、私自身が若干誤解していたかもしれませんが、「経済社会」ではなくて、「経済と社会」なのですか。「・(中黒)」がないと分かりませんね。私は、「経済社会」とは何かと今日伺おうと思って来ました。経済の発展であれば分かりますが、「経済社会」と読めてしまいます。さらに申し上げますと、ここから先は私の意見ですが、経済と社会は同じ比重なのかどうか、他にないのかということもありますが、最低限、「経済社会」と読めるようなことはやめた方がいいのではないかと。それとも「経済社会」なのですか。もう一つ、そうすると、英語に訳すとこれはどうなるのでしょうか。

(有賀室長) 私どもの趣旨としては「経済と社会」という理解です。誤解を招くようであれば、予算上、この名称を付けてしまったので、変更はなかなか難しいです。また、英語では、やはり“Economy and Society”ということになると思います。

(阿川委員) それは両立ですか。

(有賀室長) 我々は重点をどちらに置くということはしていません。両方というように整理しています。

(阿川委員) 少し乱暴のような気がします。つまり社会と経済は二つ、フィフティー・フィフティーなのですか。

(有賀室長) 特段、どちらが重いということは置いていないので、そういう意味ではフィフティー・フィフティーだと思います。

(日比谷委員) 同じ点についての質問兼コメントです。先ほどの室長のご説明では、多

分このようにおっしゃっていたと思います。このように諸般の事情があって、タイトルを変えた。しかし、グローバル人材の定義そのものが変わったわけではないので、これまでどおりというご趣旨のご説明だったとは思いますが、結構びっくりしたというか、私どもはたまたま中間評価を受ける側にも入っていますが、評価を受ける側から見ると、そのことはかなり明確に伝えていただかないと、違うことを求められるようになったのかという気持ちはやはり起こると思います。それから、今阿川委員がおっしゃったとおりですが、「経済社会」とは何ぞやということ、そして、ご説明の中では、これは非常に広義のもので学術文化を含むとおっしゃいましたが、そのあたりも何か別のご説明を頂かないと、そのようには読めないのではないかという気がします、いかがでしょうか。

(平野委員長) 委員長はあまり個人的な発言をしてはいけないかもしれませんが、今の点については、室長からも説明を頂いたような形をきちんと整理して公募し、今進んでいる取組の評価では後付けにならないようにしなければいけないと考えます。そもそものグローバル人材育成のところで始まった趣旨は、十分守って生かしながら、ひいては、それが社会の発展のためにグローバルに活動もできるという人材育成をするのだという方向で、中間評価のための書類を出していただく各関係大学にはきちんとお伝えした方がいいのではないかと思います。もし、私も学長として、これを受けるとしたら、頭の冠のところをどう受け取って文章の中に入れ込むか、成果の中に入れ込むかということには迷うと思います。学術であろうが何であろうが、社会を牽引するという結果になっていくような形で人材育成をしているはずで、そのようなことを明確に、中間評価資料を出していただくときには付けていただいた方がいいのではないかと発言しようと思っていたところです。

今の「経済社会」という言葉についてはどうでしょうか。これを変えるわけにはいかないのです。予算上の承認を受けていますので、プログラムの評価については事務局としてはいかがでしょうか。

(有賀室長) 予算上は決まった言葉になっているので、変えるのはなかなか難しいという状況です。一方で、今委員長がおっしゃったように、このような解釈だということについて、実際に昨年末に各大学に対して説明会でもご説明をしてきた経緯があります。それに加えて、今回の評価を行うに当たって、このような解釈であるということについて通知をするということではできると考えています。

(平野委員長) いかがでしょうか。

(内田委員) あまり気にしなくていいのではないかと。もともとグローバル人材は何のために育成するかというと、経済社会のためです。ですから、余計なことですが、これがあつた方がいいというのだったら入れておけばいいし、「・(中黒)」があつてもなくても分かる意味だと思います。

(荻上委員) 今は中間評価について議論しているのだと思いますが、中間評価というのは、昨年度までにきちんとできたかどうかということですから、それに関しては、グロー

バル人材育成推進事業を各大学は推進してきたはずなので、我々はそれを評価しなければいけないのだと思います。ただ、今年度以降、もし、事業の方向性を若干なり何なり変えるということであれば、それは先の話であって、評価としては遡って違う形にして評価しろと言われても困るし、大学側は今更どうしようもないことなので、そこはきちんと分けていただく必要があるかと思います。

(白石委員) この「経済社会の発展を牽引する」と付けることで、別に調書の内容を変えろと言うわけではないのですよね。ですから、プロポーザルは変わらないのだから、評価は変わらないわけで、あまり気にする必要はないのではないのでしょうか。

(平野委員長) 他にいかがでしょうか。

(明石委員) 今、白石委員が言われたとおり、この議論はここで解決する、合意に達する必要はないのだと思います。しかしながら、グローバル人材ということを取り上げた場合、我々が育成しようとしているグローバル人材は、単に経済面で優れた人材をグローバルな視点から育てるだけでは、視野が少し狭過ぎることになるので、この点では、阿川委員の問題意識に賛成です。

(平野委員長) 私も評価機構におりましたので、受ける側も含めて一言発言をさせていただくと、申請をした内容に対して、どう達成してきているかということをも最も重要視して評価に当たることが中間評価の場合に必要なと考えます。加えて希望するのは、今後においては、学術であろうが、どこの分野で国際的なグローバル人材を育成するについても、ひいては社会の発展を牽引する人を育てるという立場で、今後ともこのプログラムを進めていただきたいということを文部科学省から発送していただく資料に1枚付けて、ご注意いただくことが必要ではないかと思います。これがないと、恐らく受け取った学長から見ると、今までグローバル人材育成で、そういう気持ちもありながら申請して動いているはずだけれども、「経済社会の発展を牽引」という冠が付いてくると、ある方は狭く考えてしまうことがあるかもしれません。そういう誤解がないように、事務局から書類発送をするときに一言、説明しやすく加えておいていただけたらよろしいのではないかと思います。

阿川委員が言われたことも確かですが、財務省に出したこの冠というか、説明は変え難いようですので、ここで議論もすぐにできないので、これで中間評価の調書は出していたら、しかし、中間評価を受ける大学に対しては、先ほど私がお願いしたような書類を一枚付けていただきたい。それについては、早急に、委員の方にこういう文面で誤解なくいくだろうかということ、メールか何かでご意見を伺ってください。最終的には私に一任いただければ、それを預かりで中間評価に進みたいと思いますが、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

(白石委員) 少し違う点の一つ。この例の場合、実際の補助金の規模はどのぐらいです

か。

(有賀室長) タイプ A が 2 億円、タイプ B が 1 億円です。

(白石委員) 分かりました。2 億円ぐらいもらっているのだったら、このぐらいの報告書を出させてもいいかと思います。こういうものを見ると、どのように書くのか、その事務量、どのような人でどのぐらいの期間で何をやらなければいけないのかということを手早く考えるので、そこの作業量は実は大変なものです。ですから、コストベネフィットがあるので、ちゃんと補助金を出しているのだから、全部説明しろというようなことではなくて、そこを是非勘案していただいてやらないと、お金をもらったけれども、そのうちの半分を事務作業のために使っていたというようなことになりかねないので、そこを心配しました。

(平野委員長) ありがとうございます。大変重要なお意見です。

(阿川委員) 私は皆様のご意見に全く異存はないので、この時点で、そういうことで私は「・(中黒)」を入れたつもりで読みますので、それは構いません。

日比谷委員がおっしゃったことで、そうすると、中間評価は他にもご意見が出ましたが、今までのもので評価をするということですが、事後評価はどうなるのでしょうか。事後評価はこれが引っかかってくるのかどうかということですか。

(平野委員長) 事務局いかがでしょうか。

(有賀室長) 現時点で確たることは申し上げられませんが、少なくとも昨年度までは計画どおりですし、計画されたものについては引き続き終了時にも確認しますが、それに加えて経済的な観点で、個別にこれをやらなければいけないということは書けませんが、加えて何をされたのかというところは積極的に書いていただけるものは書いていただいて評価をするということが考えられると現時点では思っています。

(日比谷委員) 何か大体順番が決まってしまうようですが、今の例に頂いている資料 3-4 の大学で申しますと、取組状況というのは、左側のところにこのようなことで申請したというものがずっと書いてあって、年度ごとにこれをするなど、理念から何から全部、グローバル人材育成推進事業ということで、公募があったことを前提にして書いているので、新しく要素を取り入れるということになった場合は、申請内容にもさらに修正をするというようなことではないのですね。

(有賀室長) 修正は考えておりません。例としていえば、今あるこのフォーマットにさらに加えて、その他に経済社会のためにどうされたのかというところを追求するイメージです。今の段階では確定はできませんが、そのときの委員会で決定してはどうかと思っています。

(平野委員長) これは私のご提案ですが、最終段階において「経済社会の発展を牽引」というのが、明確にどのポイントであるということと言うのは、いったん動いている初期申請の段階からすると非常に難しい。それよりも、「経済社会の発展を牽引という点において好例があれば、是非積極的に書いてください」という書類の出し方をしていただいた方が今後、このような問題のプログラムを動かすときに参考になるのではないかと考えています。やはり当初の段階から途中で変えるというと、本来は再審査をやらざるを得ない。それをやらないで動く限りは、基本的には当初申請して審査を通った段階のものについて、どう達成しているかで評価をすることだと考えます。加えて、今は最終段階に行く途中ですから、中間のところで、このような観点も考慮に入れて、グッドプラクティスがあるならば、それは今後とも進めていただきたいという言い方で少し説明が要るのではないかと考えています。申請書以外のことを後から加えるというのは、厳密にはそれに加えた評価をしなければいけないと考えています。これは今のようなところで、事務局でご留意いただきたいと考えています。

それから、白石委員がご心配の評価における荷重は常に言われております。是非書類疲れをしないように、本末転倒にならないようにしていくことが必要であると考えています。これはどんな評価についてもですが、ここについても留意してください。

(白石委員) 私の提案は、定性的なところは中間評価でいくら書いてもらっても、あまり判断の参考になりません。なぜならば、みんな定性的ですから、相当ごまかして書くからです。そう言うといけません、むしろ定量的なところでぱっと見て分かるようにしておくというのがポイントだと思います。

(平野委員長) ありがとうございます。是非そのあたり注意をしていただきたいと思います。

(漆委員) 一つだけ、中等教育の立場から今の話を聞いて感じたことですが、このような名前が後から付いてくると言うことは、これは推測ですが、政権が変わって、今はアベノミクスで、経済の発展に力を入れているというようなことに関係しているのではないかと考えています。それは現段階では、優先順位としてとても大切なことだと理解した上で、教育は人を育てるのにとっても長いスパンがかかります。その間世界情勢や経済情勢も変わってきます。大学の動きを見て、中高生、またその下の子たちも、保護者もどういう方向で力を付けていったらいいかということも未来から逆算して準備しています。どの分野が将来的に経済に貢献するかということも変わってくると思うので、教育に関しては少し長いスパンで、幅広いネーミングを考えることも必要ではないかと、小さい子を預かる立場から感じました。

(平野委員長) ありがとうございます。国全体がどうあったらいいのかということも政府も含めて考えていくべきだろうし、教育、人づくりそのものはやはり時間をかけながらもっていかなければいけません。しかし、軸をしっかりした人たちを育てていかなければ

いけないと思っていますので、これは上の方の委員会にも希望を出したいですね。どうもありがとうございます。

では、事務局としては、大変貴重なご意見を頂いたので、中間評価の資料を各大学に送るときに、今のようなご注意を受けて、書類の発送をお願いしたいと思います。

(長尾委員) 今おっしゃった社会情勢も含めて、いろいろな要因で補助期間途中で条件が変わっていくという事情があることは分かりますが、今回、最初の公募要領に、付け足しがありました。できるだけ途中で変えないという姿勢を保っておかないと、予算も減らされていっている、タイトルに文言が付け加わるということになると、今からスーパーグローバル大学も含めて、様々な申請に一所懸命頑張ろうとしている現場が揺らいでいくと思います。文部科学省と大学、高校との信頼関係を、きちんと確保していかなければいけないと思います。いろいろな事情があるのは分かりますが、極力途中で変更しないという方向で行っていただきたいと思います。

(平野委員長) ありがとうございます。大変重要なところです。正直申し上げて、私も委員長を務めていて、ある意味、途中でこういうことはそう経験のないところですので、先ほどから、くどいぐらいをお願いをしているところは留意をしながら、申請をし、採択された大学においては、その初志の目的を十分全うしていただきたい。ひいてはその成果が経済社会の発展に大いに貢献するというような形で、このプログラムは成果を出していただきたいと願っています。是非そのような立場で、皆さんご理解くださっていると思いますが、進んでいってもらいたいと願っています。よろしくをお願いします。

### (3) 平成24年度「大学の世界展開力強化事業」採択プログラムに対する中間評価について

#### 【質疑応答】

(平野委員長) ご意見等がございましたらよろしくをお願いします。

(白石委員) 要するに、これは学生を派遣するわけですね。ちょっと手間がかかるのは分かっているのですが、実際に行った学生に対するインタビューのようなものを是非入れ込んでほしいのです。逆に定量的に数字だけ見たのでは学生が向こうに行って何をしていたのか分からないので、その学生が実際にこういうプログラムをやって、どのくらい恩恵を得たのかということをきちっと把握しておく必要があると思います。

それからもう一つ、これは大変なので、恐らく最終評価のときになるのかと思いますけれども、受け入れた向こうの大学の方がこういうプログラムをどう受け止めたのかというのはどこかで一度きちっと評価しておく必要があると私は思っています。

(平野委員長) どうもありがとうございます。大変重要なところだと思います。例えばキャンパス・アジアの場合は、学生の意見を聞いたことが大変良かったと思います。私は学生の報告会も聞きましたけれども、素晴らしい意見と、同窓会的な会を持って今後とも

動きたいという申し出もありました。大いに支援をしていけばと思っておった次第です。これもいい形で学生の意見を反映できるようにしていきたいと思いますが、事務局の方、何かご意見があったら。

(有賀室長) 学生へのインタビューはできる限り進めたいと思います。実際のヒアリングにつきましては大学の先生に来ていただいて行うので、学生に来てもらうのはなかなか難しいかなと思うのですが、現地調査は、全部ではないのですが、一部実施する大学があると思います。その中で現場の学生の声というものを聞けるような形にしたいと考えております。

(平野委員長) よろしくお祈いします。

それでは、今提案があったような形でこの中間評価を進めるようにしたいと思います。中間評価の準備を開始していただくとともに公平・公正な評価をお願いしたいと思います。よろしくお祈いします。

#### (4) 「大学の世界展開力強化事業」海外連携大学の追加について

##### 【質疑応答】

該当なし

(平野委員長) ありがとうございます。

以上で、公開の議事を終了いたします。

以降は委員の選考等に関する審議に入りますので、非公開としたいと思います。傍聴してくださった方々、今日はどうもありがとうございました。

\*\*\*傍聴者退出\*\*\*

#### (5) 審査部会、評価部会委員の選考について (非公開)

(非公開議事のため未掲載)

\*\*\*議事終了\*\*\*